

(紹介)

アーノルド・A・ロギー

『トマス・ホップズ』(二)

岡 部 悟 朗

三一(一) 学生時代

オックスフォード大学史を繙けば、ハート・ホール、モードリン・ホール、ハートフォード・カレッヂの名称が複雑に入り組んでいて戸惑ってしまうだろう。ハートフォード・カレッヂ——正式にはハート・ホール——は、一八〇五年に解散された。モードリン・ホールは一八七四年にハートフォード・カレッヂとして再建され、ハートフォード・カレッヂは今日も存続している。

モードリン・ホールは一六〇二年モードリン・カレッヂから分離したものである。そのモードリン・ホールに一六〇三年、トマス・ホップズは入学した。

モードリン・カレッヂ、モードリン・ホール及び後のハートフォード・カレッヂの卒業生名簿には、聖書翻訳家ウィリアム・テインダル、詩人でセント・ポール寺院参事会長ジョン・ダン、英国法史家ジョン・セルデン(ホップズの友人)、大法官マシュー・ヘイル卿、風刺作家でダブリン参事会長ジョン・スウィフト、ホイッグ党政治家チャールズ・ジェームズ・フォックス、作家イヴリン・ウォー、そしてジョン・ロッキの名が見える。しかし、秀いでた卒業生のあらゆる

ストにはホップズ自身の名は見い出されない。例えば、Sir John Bejeman, 'An Oxford University Chest', 1938 はホップズについて触れていない。

モードリン・ホールの年間入学者は平均二三名で、他のどの学寮よりも人気が高かった。ホップズは一五才の誕生日間も無く入学したが、その入学年齢は当時稀ではなかった。エリザベスやジェームズ一世の治世、十才の学生も二一才の学生も入学許可されたが、それ以下あるいはそれ以上の年齢だと稀れであった。一五八一年のオックスフォード大学記録によれば、入学生のうち九才（一名）、十才（五名）、一一才（一八名）、一四才（四七名）、一五才（七四名）、一六才（九五名）、一七才（一一一名）、一八才（二二九名）、一九才（一〇五名）、二二才（三三名）であった。

入学に際しては、一五六三年に公布された三九ヶ条信仰箇条、英国国教会祈祷書、及び国王至上法を認める宣誓を行わねばならなかった。

入学金等は社会階級に応じて別個に定められており、例えば貴族の子弟は一三シリング四ペンス、ホップズなどの平民の学生は四ペンスを納めた。学資については、ホップズのように自費の者と、学業基金を受ける者とに分れた。学業基金は、年長生には年間八ポンド、文学得業士には五ポンド一〇シリング、年少生には四ポンド一〇シリング与えられた。裕福な学生は、食糧、下宿、衣服、学費、旅行等に年間約三〇ポンド遣ったが、ホップズのオックスフォード教育費がいくらかかったかは定かでない。オーブリーによれば、伯父フランシスが「モードリン・ホールで勉学するのに大いに援助、と言うより、まるまる費用を出してくれた」（『名士小伝』、九五頁）が、ホップズは、伯父フランシスについてかれの著作のどこにも触れていない。

学生は通常五時、夏はもつと早く起床し、朝六時の朝食は一片のパンと一杯のビールつきの軽食であった。一日の正餐である昼食は通常一一時で、夕食は五時に出された。普通、昼食は、塩魚、牛肉、羊肉、それにビールであった。祝日の昼食（ブレイズノーズ・カレッヂの場合）は、牛肉、豚肉、兔肉、キャベツ、ぶどう酒、砂糖、林檎、チーズであった。

通常の夕食は、兎肉、サクク酒、エール、林檎、チーズであった。食事の前後には祈りがラテン語で唱和された。食後は部屋にいたり、図書館で読書したり(当時は、多くの書籍が棚に鎖で繋がり移動させることはできなかった)、カレッジのグラウンドを散策したりした。

学生は一部屋に二、三、四人、あるいはそれ以上で居住した。部屋は寒々しく家具も少なかった。ごく少数の部屋に暖炉があったが、通常の学生は、寒い冬を暖炉もなしに過ごし、しかも部屋は大抵じめじめしていた。一五五〇年のケンブリッジ大学報告が述べるところでは、学生たちは就寝前、足を暖めるために、半時間走りまわったりするという。衛生設備は未発達であったし、入浴の習慣はなじみ薄かったから、いつもシラミ、ノミ、ナンキンムシ、時にはネズミ、マダニ、コウモリを駆除しなければならなかった。狂犬病は珍しくなかったし、ペストにも襲われた。ホップズ入学の年一六〇三年は、一七世紀に六回にわたるペスト大流行の第一回目であったし、小流行はそれ以上の回数に及ぶ。

学生生活はすべてが厳格に強制されたわけではないが、おびただしい規則にしばられていた。礼拝を軽んじたり、食事に遅れたり、閉門時間に遅れたり、等々、とにかく規則違反をした場合、鞭たたき、罰金、監禁、特権の取消し、停学、そして放校の措置がとられた。ホップズは後年、オックスフォードはかなり放縦だと述べたが、ホップズ自身が規則違反をしなかったのか、あるいは巧く免れたのか、何ら情報はない。

一七世紀初期のイングランドにおける大学教育の主要科目は、文法、神学、修辞学、論理学及び道徳哲学であった。大抵の学生はラテン語に精通していたが、ホップズのようにギリシア語にも精通する者もいた。オックスフォードでは、数学、天文学、地理学そして「物理学」に数講座設けられていた。ユークリッド幾何学を含む幾何学は、ブレイズノーズ・カレッジで教えられ、またフランス語やイタリア語も教えられていた可能性がある。しかし、それらは全く初歩的なものであった。論理学、哲学等の講座での最高の学問的源泉はアリストテレスであった。一六三六年頃まで、オックスフォード大学ロード規則によれば、文学得業士の決定に際し、アリストテレスの教義に従い論理学、修辞学、政治学、道徳哲学

の諸命題を論ずることが要件であった。アリストテレスが言及されない場合は、プラトン、プトレマイオス、キケロ、ストラボン等が源泉となった。プリニウスやコペルニクスが参照されることはなかった。年間四学期制で、一〇月から一二月までの第一期<sup>ミカエリス</sup>、一月から三月までの第二期<sup>ハイラリー</sup>、四月から五月までの第三期<sup>イリスター</sup>、五月から六月までの第四期<sup>トリニデー</sup>であった。モードリン・ホルルの授業は、一五一六年創立のオックスフォード学寮の一つ、コープス・クリステイのそれとほぼ同じものだと思えるが、コープス・クリステイの授業では、月、水、金の午前八時から古典学で、ウアレリウス・マキシムス、プリニウス、キケロの上級作品等が、火、木、土には、ベルギリウス、オウイディウス、ユウエナーリス、テレンティウス、プラウトウスが論じられた。教会祝祭日の午後にはホラティウスやペルシウスに関する公開講義に充てられた。ギリシア語教授は、月、水、金の午前一〇時に話し始め、テオドルス、イソクラテス、フィロストラテスの文法を論じ、火、木、土にはアリストファネス、ユーリピデス、ソフォクレス、トウキュディデス、プルターク、そして、無論アリストテレスを含む多数の哲学者や歴史家を検討した。公休日講義は、ホメロスやプラトンに費やされた。神学部のリーダー(Reader)が毎日午後二時から聖書について説教を行った。

ホップズは、こうした授業について——学生時代にどう思ったかはわからないが——後年、陳腐で大きな術学ぶりに辛辣な不満を述べる。その術学ぶりについては、科学と発見の新時代に一層歩調を合わせる研究方法にとつて代られたはずと後までもけなし続けた。素養のない教授らのラテン語、形而上学と奇蹟と伝説を混ぜ合わせた呪文、言葉の罫によって絞め殺された科学を忌み嫌った。「リヴァイアサン」の中で、大学は「ローマ教会の侍女」として哲学を教授していると述べたし、オーブリーには、アリストテレスは「今までの最悪の教師で、政治家、倫理家として最低だ」と語った。「ビヒモス」では、アリストテレスだけでなく、カソリックであれカルヴィニストであれ、大学の宗徒を扇動の主たる源と考えた。それは、カソリック教徒、ピューリタン双方とも「臣民は宗教的理由から君主を見捨て、かれに対して武器をとることは合法的である」と主張したからである。

しかし、大学も徐々に変化し始め、一七世紀半ばまでには自然科学と数学の科目は履修課程で主要なものとなっていた。しかもそれらは以下の傑出した人々によって担われた。即ち、サヴィル講座担任教授・幾何学のジョン・ウォリス、望遠鏡の発明家ジョナサン・ゴッダード、サヴィル講座担任教授・天文学のセス・ウォード、化学のロバート・ボイル、医学ではトマス・シドマン、ウィリアム・ペティ、血液循環の発見者ウィリアム・ハーヴェイ、そして、一六四六年から一六六〇年まではクリストファ・レンがサヴィル講座天文学担任教授であった。

ホップズは後年、『物体論』(一六五五年)の中でジョン・ウォリスを「私の敵」と呼び、ウォリスが「戦場からついに撤退した」と勝利宣言を行うが事実は逆であった。ペティもハーヴェイもホップズの友人であったが、特にハーヴェイについては、同じ『物体論』の中で「自然科学の中でも、もっとも有益な部門である人間の身体についての科学を最初に発見した人物は、すぐれた知恵をもってなる、われわれの同国人ハーヴェイ博士その人である」と絶賛した。ハーヴェイは一六五七年七九才で亡くなるが、その遺言状の補足の中でホップズに「一〇ポンド遺贈すると書き残した。ホップズとハーヴェイが出会ったのは、フランシス・ペーコンを介して一六二一年頃と思われる。ハーヴェイが国王の鹿を解剖するのを、ホップズは観察したり助けたりしている。クリストファ・レンについては『イングランドにおける哲学者と慣習法の学徒との対話』(一六六一年)の中でホップズはレンを賛辞しているが、オーブリーによれば「二人は知合いではなかった」という。ホップズは、かれが批判した人々を含め、非常によく知っていたが、一方、オックスフォードの権威者たちは『市民論』(一六四二年)も『リヴァイアサン』(一六五一年)も冷たくあしらった。一六五四年に『市民論』がローマ・カトリック教会の『禁書目録』に載せられた時、ホップズと怒りを共有した者は少数にすぎなかったのは確かである。

一六七二年に書かれた『自叙伝』では、『リヴァイアサン』や『ビヒモス』で行っていたオックスフォード非難は繰り返さなかった。しかし『自叙伝』の説明によると一六〇三年から一六〇八年までのオックスフォードはひどく退屈であつたらしい。授業は退屈だし、教師は平凡だし、級友はかれより劣っていたという。ホップズは、正規の教室授業と同じ位

の時間を大学から離れて独自に勉強や読書に耽った。ホップズは生涯、光学に関心を抱き数冊の本を書くが、オーブリーが伝えるように「オックスフォードにおいてホップズ氏は特に夏の間、極く早く起きて」小鴉を観察した。オーブリーは「光学について説いている際、あのように小さな眼にも鋭い視覚のある例として」語ったという。またオーブリーは「オックスフォードでは（ホップズは）製本屋の店に行くのが大好きで、地図に見惚れていた。」と伝える。ホップズ自身は「自叙伝」の中で「天体地図や世界地図をも心の糧にした。：私はまた、ドレークやキャヴェンディッシュがネブチューンの胸の飾り帯を投げ入れた場所やかれらが訪れた様々の地方を観察した。私は、人類のちっぽけな開拓地や未踏の地に描かれた巨人を選び出した」と述べた。フランシス・ドレーク卿（一五四〇？—一五九六）は対アルマダの勝利に加え、一五七七一八〇年の世界一周を含む様々の偉業で名高い。トマス・キャヴェンディッシュ（一五五五？—一五九二）は、一五八六—一八八八年に世界一周を成し遂げた史上三番目の人物であった。一五八八年（ホップズ生誕の年）九月、キャヴェンディッシュは世界周航をなしとげてプリマスに帰港した。「その船中にクリストファとコズマスという英語の名前を与えられた二人の日本人青年の姿があった。二人は二〇歳と一七歳であったという。：その後の彼らの消息については、キャヴェンディッシュの最後の航海に加わってブラジルにでかけたことが知られるだけである。」（小池滋監修「イギリス」新潮社 一九九二年、三六頁）かれこそ、最初にイギリスを訪れた日本人であった。

ホップズは一六〇八年二月五日、オックスフォードを卒業すると同時に、ウィリアム・キャヴェンディッシュ（後の第二代デボンシャー伯）の家庭教師となるが、このウィリアムと前記トマス・キャヴェンディッシュとの関係は不明である。ウィリアムの父、同名のウィリアム・キャヴェンディッシュ（一六一八年に初めて初代デボンシャー伯となる初代ハードウィック男爵）の求めに応じ、家庭教師としてホップズを推薦したのは、モードリン・ホルルの学寮長ジョン・ウィルキンソンであった。オーブリーは、推薦者は学寮長サー・ジェームズ・ハシーであると記している（『名士小伝』一〇〇頁）が、一六〇五年に、ハシーに代ってウィルキンソンが後を継いでいた。ウィルキンソンが何故にホップズを推薦したのか、

その理由は不明である。オーブリーによれば、当時一八才の子息ウイリアム・キャヴェンディッシュは、「もし自分と同輩の学者がそばに侍してくれたら、いかめしい博士の教導よりも、わが学問のためになるであろうという意見を抱いていた」という。

### 三一(二) キャヴェンディッシュ家

ホップズは、ウイリアム・キャヴェンディッシュの家庭教師となることによつて、終生、即ち七〇年間もキャヴェンディッシュ家と関わり合いを持つことになる。このキャヴェンディッシュ家をデボンシャー伯爵としての隆盛をもたらしたのは、実は、ウイリアムの祖母エリザベス・ハードウィックであつた。シユリユーズベリ伯爵夫人エリザベスは、一五二〇年から一五二五年の間に生まれ、ホップズがオックスフォードを卒業した日の一〇日後、即ち一六〇八年一月二五日に亡くなつた。彼女は生涯、四度結婚した。即ち、初婚は一五四四年、ロバート・バロウと、再婚は一五四七年、ウイリアム・キャヴェンディッシュ（ホップズが家庭教師となつたウイリアムの祖父にあたる）と、三度目の結婚は一五五九年、ウイリアム・セント・ルー卿（一五六四年没）と、四度目の結婚は一五六八年、第六代シユリユーズベリ伯爵ジョージ・タルボットとであつた。タルボットはエリザベスより四〇才も若く、既に六人の子持ちであつた。一五八四年、結婚生活は破綻をきたし離婚する。

ゼントリ乃至スクワイア身分に属していたエリザベスの初婚の相手ロバート・バロウは従兄で、社会階級上かなり高い一族の出身であつた。かれは結婚後、間も無く一四才にして亡くなつた。エリザベスは二〇才であつた。再婚の相手ウイリアム・キャヴェンディッシュ卿は修道院の解散から膨大な財産をつくりあげた。五つの州に散在する領地をもち、それらを売却しダービーシャー州とノッティンガムシャー州に新たに領地を購入した。三度目の結婚相手ウイリアム・セ

ント・ルー卿はウイリアム・キャヴェンディッシュ卿以上に高い社会的地位と巨大な富を有していた。結婚後五年にして亡くなり遺産の大半をエリザベスに遺贈した。四番目の夫ジョージ・タルボットはイングランドで最高に富裕な人々の一人であった。あまたの屋敷と何千エーカーの農地に加え、鉄鉱山、鉛鉱山、鋳物工場、船舶、ガラス工場、炭鉱を所有していた。この結婚が破綻した際、タルボットはチャットワースが自分に属すと主張したが彼女は同意しなかった。一五九〇年頃には、彼女が父親から相続していたハードウィックを改築し、それはハードウィック・オールドホールと呼ばれた。間も無くタルボットが亡くなり、彼女は寡婦としての取り分を加え、七一才でイングランドで最も富裕な女性となった。チャットワースは彼女の死後、長男ヘンリーが相続し、ハードウィックは二男ウイリアムが相続する。一六一六年ヘンリーが亡くなると、チャットワースはウイリアムが相続した。

祖父ウイリアム・キャヴェンディッシュ（一五〇五—一五五七）は、エリザベスと結婚した一五四七年に四七才であったが、かれは既に二度結婚し二人の娘がいた。ウイリアムは、エリザベスとの間に六人の子供をもうけた。即ち、長男ヘンリー（一六一六年没）——かれはタルボットの娘と結婚する。かれは、嫡出子が一人もおらず、「ダービーシャー州・スタフォードシャー州全体の共同利用の雄牛」と呼ばれた。二男ウイリアム——かれがウイリアムの父にあたり、一六一八年初代デボンシャー伯となる初代ハードウィック男爵である。三男チャールズ——かれの子息はウイリアムといふニュー・キャッスル公爵となる。（一六七六年没）（ニュー・キャッスル公爵家系図については水谷三公『英国貴族と近代』東大出版会、一九八七年、二一六頁参照のこと）爵位は、ウイリアムの子息ヘンリーが継ぎ、一六九一年に没した。娘は三人いるが、その一人はエリザベスといふ、スコットランド女王メアリーの弟チャールズ・ステュアートと結婚の話がもちあがつたが、これは破談になった。もう一人の娘はメアリーといふ、タルボットの子息と結婚した。いま一人の娘については情報がない。

エリザベスは好運にも恵まれたが、富と権力の象徴の不屈の収集家であり、自分自身と子供たちのためには極端な野心



家であった。すこぶるタフであったが、移り気でせっかちで情にもろかった。そうしたことが窮境を招くこともあったが、一五七四年から七五年の冬にかけてのロンドン塔監禁を除けば幸運な人生を送った。

エリザベスの最高の偉業ハードウィック・ホールは、一六〇三年の概観のまま現存するエリザベス朝建築様式の傑作である。前方から邸宅に近づくとき五〇の大窓をもつファサードを眼にする。四階建の六つの大塔の上にエリザベス・シユリユーズベリのイニシアル、E・Sが銘刻されている。大塔と大塔の間は三階建で、併せて六〇余の部屋からなっていた。ホップズは、二階の子息ウイリアムの部屋に隣接した一室を与えられたであろう。三〇人をこす屋内使用人のうち、若干の料理人、ウエイター、メイド、洗濯女がホップズにあてがわれた。

ウイリアムの父、ハードウィック男爵は、一六一八年に国王への一万ポンド(現在のおよそ一〇〇万ドル)の献金と引換えにデボンシャー伯となった。かれは母の性格や気質をもっともよくひきついでいた。一六〇八年から一二年にわたるハードウィックの改築に一六三ポンド以上、そして一六一九年から一二年にわたる増築にそれ以上の金額を費した。一六一九年八月、プリンス・オブ・ウエールズ、後のチャールズ一世が正餐に訪れた際、初代デボンシャー伯は新たに一人の料理人を雇い入れ、皇太子の召使や「皇太子とトランプをする御婦人方」にさえ五ポンド一〇シリング支払った。フリーズ、タピストリー、テューダー家歴代領主の肖像画、壮大な炉端、紋章盾に飾られた大広間での正餐に、子息ウイリアムと共にホップズも列席した。

ホップズは人生の大半を、このハードウィックとチャットワースで過ごした。一六七九年一〇月、ホップズが病いに倒れたのはチャットワースであった。かれは死の床にいたにもかかわらず、一月末に一族がハードウィックに移った際、同行すると主張し、一二月四日、ハードウィックで亡くなった。

初代デボンシャー伯ウイリアムの長男で同名のウイリアム、第二代デボンシャー伯にホップズは家庭教師として勤めるのだが、かれは妻クリスチャンとの間に、第三代デボンシャー伯となるウイリアム、二男チャールズ、娘アンをもうけた。

ホップズが初めてハードウィックにやって来た時、二〇才の青年であったし、かれの弟子ウィリアム・キャヴェンディッシュは一八才であった。ウィリアムは既に前年の四月にクリスチャン・ブルースと結婚していた。クリスチャンはキンロスのブルース公エドワードの一人娘で、その年一二才の可愛い赤毛の少女であった。当時、ウィリアムは既にマーガレット・チャタートンなる女性と懇ろであったが、経済的政治的理由からクリスチャンを選んだ。

ホップズがハードウィックの一員となった二年後、一六一〇年に、かれとウィリアムはドイツ、フランス、イタリア等の諸都市をめぐる。その年の五月、フランス国王アンリ四世がフランソワ・ラヴァイヤックに暗殺されたが、その頃、かれらはフランスに滞在していたと思われる。一六〇五年のガンパウダー・プロットのガイ・フォークスとその共謀者もラヴァイヤックも狂信的なカソリック教徒であった。その事件は、国内秩序と安定の為の唯一最大の条件は宗教が政治的権力に全面的・絶対的に服従することであるとされるホップズの信条に刻印をおしたであろう。ラヴァイヤック事件については、後年、『プラムホール大僧正への返書』（一六六八年）及び『イングランドにおける哲学者と慣習法の学徒との対話』の中で言及している。

この頃のホップズ初期著作は、一六二七年頃の「丘の驚異について」という詩集 (*De Mirabilibus Pecci: Being the Wonders of the English Peak in Darby-Shire, Commonly Called the Devil's Arse of Peak*)、また最初に知られる政治著作、一六二九年のトゥキュデイデスの翻訳、そしてフランシス・ベーコンの『随想集』のうちの二、三篇の随筆のラテン語への翻訳である。「丘の驚異について」という詩集は、詩としてもホップズ思想研究にとつてもさほど価値がないから割愛し、またトゥキュデイデス翻訳については後述することにする。

ホップズがベーコンの秘書を勤めるのは一六二〇年から二五年までであるがベーコンの『随想集』の翻訳に関しては、ベーコンもホップズもどこにも言及していない。オーブリーが伝えるのみである。ベーコンは一六二六年に亡くなり、その年にオーブリーが生れたから、オーブリーの情報はホップズのみを負うものである。オーブリーは「ベーコンは（ホッ

ブズと)言葉を交えるのを大層好まれた。…『随想集』の数篇をラテン語に翻訳するのを手伝った。その一つが「都市の偉大さについて」であり、…残りが何であつたかは忘れてしまった」という。「都市の偉大さについて」という題名は、オーブリーが誤つて伝えており、正しくは「王国と国家(Estates)の眞の偉大さについて」である。オーブリーが「忘れてしまった」随筆は「偽装と隠蔽について」と「革新について」であつた。現代のベーコン研究の第一人者W・オールディス・ライトによれば「あらゆるものの中で最善に訳されたものの一つ」であり、また、現代のベーコン伝記作家キヤサリン・D・パウエンによれば「頑固で、…容赦なく、笑いに対してよりもむしろ精神的衝撃に長ずる。しかもその一つは忘れがたいものもある」という。

ベーコンとホップズの性格や信条の相違にもかかわらず、両者には姿勢や見解の上でも多くの類似点があつた。両者ともアリストテレスやスコラ哲学を攻撃し、ベーコンもアリストテレス学説を教える大学に批判的で、「大学における学生が、あまり早く、またあまり未熟のうちに論理学や修辞学というような、子供や新参者より卒業生に一層適当な学芸をやり始めるのは誤りであり、…(従つて)これらの学芸の英知が偉大で普遍的なものであるのに、殆ど軽蔑されるようなものになり、子供じみた詭弁と、こつけない氣どりに墮してしまうということである」と述べた。(ベーコン、成田成寿訳『学問の發達』中央公論社、世界の名著、三三二—三三三頁)ベーコンは実験的帰納法の提唱者、ホップズは抽象的演繹的論理学の支持者であつたが、D・ブッシュによれば以下の点でも類似していた。即ち、「あらゆる人間の知識を体系化しようとした点。科学を眞理の鍵として利用する点。知識の目的として効用や力を理想とする点。実在は多かれ少なかれ機械的であり、感覚上の印象は主観的だとする概念の点。目的因の放棄の点と、知識領域と信仰領域の分離の点。自然主義的原理の、自然的な世界から道徳的・社会的な世界への敷衍の点」である。両者はトゥキユデイス賛美者の点でも共通していた。ベーコンは「ギリシア史に関連した」トゥキユデイスとクセノフォンの原典は、全然減少させることなく保存し、ただ補完し、継続するべきものである」という。(ベーコン、同右、三三三頁)ホップズによるトゥキユデイス翻訳に関

してベーコンが一定の役割を果たしたかもしれない。ベーコンは、自分の眼からみても他人の眼からみてもトゥキユディエスでは全くなかったが、ホップズはベーコン告訴とトウキユディエス追放との間に一定の類似性をみたかもしれない。一六二二年、大法官ベーコンは、収賄や職権乱用等の訴因で議會により告発され、四万ポンドの罰金、無期のロンドン塔投獄等の有罪判決を受けた。幸いにも評決すべては執行されなかったが、かれの政治経歴はそれで終った。ホップズは、庶民院や貴族院の裁判官の多くが高い位置での道徳性によるよりも個人的な野心、嫉妬、敵愾心によって動機づけられた人々であることを十分に知っていた。ホップズはトゥキユディエス翻訳の序文で、たとえかれらの行為に「神慮も勇氣も」欠落しているとしても、事態がうまくいかない場合、「事件のみで判断する」人々には、「中傷の道」が常に開かれており、そして「公共善への献身の姿をした妬み」が安易に告発を手柄とすると書いた。ホップズにとってベーコンやトゥキユディエスの事件は、所詮、立法議會への嫌悪と不信を確証するに役立つたにすぎない。

最後に、ホップズの弟子、第二代デボンシャー伯爵ウィリアム・キャヴェンディッシュとの二〇年間について触れておこう。オーブリーは、このウィリアムについて「浪費家」で、ホップズが金策に走りまわったという。しかし、ホップズ自身は、「自叙伝」の中で伯爵は「主人というより友人であった。だから、この時代は、私の人生の中でとびぬけて素晴らしい日々であった。今でもなお、私に幸福な夢を与えてくれる。かくなる歲月すべてにわたって、かれは私に安逸と、私の研究の為にあらゆる種類の書物を与えてくれた。：「かれは」私の優しく寛大な主人「であった」と書いた。伯爵に献げられた「トゥキユディエス」のホップズの献辞は、「文芸を自由に研究した人々」に対する伯爵の傾注をほめたたえ、「伯爵のところにあるもの以上に、大学を必要とする」人は誰もいなかったと付け加える。伯爵は「偉人、歴史、文明的知識が膨大な時間をかけた労苦に最もふさわしい学識」を示し、「学識を、研究によって吸収し、判断によって会得し、祖国に役立つ知恵や能力に変える為に読書し、そしてまた熱心に専心した。しかし、そうしたことは党派争いや野心から熱心であったのではない」とたたえた。

ホップズ自身もオーブリーも触れていないのだが、ノエル・マルカムによれば、ホップズと伯爵は、ヴァージニア植民地やバーミユード諸島に關係する会社と関わっていたという。一六二二年六月一九日頃、ホップズがヴァージニア会社の一員になったのは事実らしい。従つて、サマー諸島会社の株主でもあった。サマー諸島会社は、バーミユード諸島の植民地に關係するヴァージニア会社の、独立はしているものの、大抵は從屬的な企業体であつた。ホップズは「続く二年間に三七回を下らない会合」に伯爵と共に加わり、パトロンの立場に立つて発言した。ヴァージニア会社もサマー諸島会社も、終始、資金ぐりや經營をめぐつて大論争にまきこまれた。一六二三年七月、ウォリック男爵ロバート・リッチが伯爵の虚言を非難した際、ホップズは出席していたに違いない。男爵と短気な伯爵は、決闘が禁じられていたにもかかわらず、オランダで決闘する取り決めをむすんだ。しかし、国王ジェームズが聞き及んで、結果的に、「すべての港が監視されるよう命ぜられた。キャヴェンディッシュはショーハムで捕えられ、ある紳士の邸に拘留された。ウォリックは商人にばけてネーデルランドに逃げたが、гентでみつかり、その事件全体が立ち消えになつたらしい。」ホップズは「リヴァイアサン」の中で、以下のように記す。「私的な決闘は、非合法ではあるが名譽なことであり、また、それを拒む者には名譽が与えられると規定され、挑む者には恥辱が与えられると規定されるような時がくるまでは、常にそうであろう。…たいていの決闘は、決闘者の一方または双方の短気な言葉の結果であり、また不名譽に対する恐怖の結果であり、かれらは短気のとりこになつて、汚辱をすすぐべく決闘するにいたるのである。」(岩波文庫(一)、一五六頁)

しかし、ホップズが当時のそれらの事に全く触れないのは、それらの会社の指導者たち、即ち、サンデー兄弟、ダイジェス、ダンヴァースが「一般的に、宮廷に反発して祖国に、衡平法に反発してコモン・ローに、国王大權に反発し議會特權に共感」を示しており、サンデー兄弟は革命時、議會軍の大佐として軍務につき、ダンヴァースは、一六四九年チャールズ一世を処刑にした六七人の判事の一人であつたから、ホップズはかれらと結びつけられなくなつたのであろう。

また、ホップズは、ヴァージニア会社の報告を通してアメリカ・インディアンについて熟知していたはずであるが、

「リヴァイサン」の中で四ヶ所、例えば「アメリカの多くの地方の野蛮民族は、小さな諸家族の統治のほかには、まったく統治というものをたないで、…小さな諸家族の一致は自然的情欲によるのである。」（岩波文庫（一）、二〇五頁）とのみられる。アメリカ・インディアンの社会は「貧しく、陰険で、残忍で」あったのだろうか。

ところで、「浪費家」第二代デボンシャー伯は、「快適な生活と過度の放縱」のせいで、一六二八年六月二〇日、三八才で亡くなった。かれの生活ぶりはかれの資産をこえていた。三人の子をもつ寡婦となったクリスチャンは、直ちに、亡夫の負債の返済に関わる三〇余の訴訟にまきこまれた。相続領地の売却ですらその返済を満たすことができなかった。かの女はその為、節約せざるをえなかったが、それがホップズの解雇につながったか否かは確かでない。ともかく、ホップズはしばらくして、即ち、一六三一年に再びかの女の仕事に戻った。その間、ホップズが教える別の青年がいたり、別の大陸旅行があったり、トゥッキュディデスの翻訳が現われたりする。

### 三一(三) 『トゥッキュディデス』翻訳

ホップズがいつ「トゥッキュディデス」翻訳を開始したかは定かではない。レオ・シユトラウスは、「一六二八年以降ではない」とのみいう。（添谷他訳「ホップズの政治学」みすず書房、一九九〇年、序言八頁）成程、ホップズは、翻訳が十分進んでから、一六二八年三月一日、ロンドン出版業者登録簿に登録した。その登録簿への登録は国王の出版許可と同じことであった。それがなければ、いかなる書籍であれ、印刷も売買もなされなかった。三ヶ月後の六月二〇日に、第二代デボンシャー伯が亡くなったから出版は延期されたであろう。一月初め、故二代伯爵への「献辞」の原稿が、伯爵の未亡人クリスチャンの下へかの女の許可を求めて送られた。そのクリスチャン宛書簡の中で「間もなく印刷の準備ができますので、都合よくいきますように直ちに」送り戻すよう要請している。

一六二九年、初版一刷りが出版された。そのフル・タイトルは「Eight Bookes of the Peloponnesian Warre, Written by Thucydides, the Some of Olorus: Interpreted with Faith and Diligence Immediatly out of the Greeke by Thomas Hobbes, Secretary to the Late Earle of Devonshire」であった。初版本は直ちに成功を博し、一六二四年と四八年に増刷され、一六七六年の『トゥキュデイス』は第二版の形で再刊され、第三版「増補改訂版」はホップズの死後、四四年経て一七二三年に出版された。オーブリーによればホップズは「詩人ロバート・エイトンや桂冠詩人ベン・ジョンソンに自分のトゥキュデイス訳の文体をどう思うか教えてくれと頼んだことがある」という。しかし、オックスフォード大学史において最も秀いでたギリシア欽定講座担任教授ベンジャミン・ジャウイット(1817-93)によれば訳文は「粗雑」だし「真価以上に賞賛されてきた」という。一方、現代の翻訳家M・I・フィンレイは訳文は「力強い」といい、R・ウォーナーは「正確で男らしく、しかも断固とした」ものであるという評価である。

ホップズは『自叙伝』において、歴史家の中でも「格別好き」な「トゥキュデイスは「民主主義がいかにも愚劣であるか、そしてまたどの程度まで一人の人間が会議体より賢明であるか」を教えてくれた、と書いた。続けて、「この著者はイギリス人に英語で話しかけること、そして詭弁に耳を傾ける誘惑に警告することを、私の仕事にした」という。つまり、トゥキュデイスの『戦史』は既に一五五〇年に英訳されていたが、ホップズが改めて翻訳する意味は、一六二九年のイングリランドに取り分け関係しているからだ、と主張したのである。

ところが、トゥキュデイスは、民主主義や「詭弁」に反対したのではなく、その時代まで先例のなかった戦争とその結末について書き著したのであった。

ギリシア人によって爾来体験された中で最悪のペストが流行した間に、紀元前四三一年から四〇四年にかけてアテナイ・スパルタ間で闘かれたペロポネソス戦争は、民主主義か寡頭政かについて理想やイデオロギーの相違による戦争ではなく、まさしく帝国間の戦争であった。六〇年前に、同盟の指導的地位についたアテナイは、ペルシア専政と闘い勝利

を博した結果、より大きな力と富を求めたのであった。ペロポネソス戦争の真の原因は、「強欲、いかなる権力もいかなる領土も満足させない、権力と領土への奇妙な情念であった。アテナイ人とスパルタ人は、唯一の理由から——つまり、かれらは強力であったし、それ故、より強力な力を競い合った——闘かったのである。かれらは民主的アテナイと寡頭的スパルタの違いからではなくて、似ていたから闘ったのである。」戦争の末期に近づくにつれ、軍事支出に国力をそがれ、政治不安に分裂させられ混乱させられ、同盟国に見捨てられ、そして挽回のための海軍によるシシリー遠征をやり損なった。それは戦鬪上の単なる敗北にとどまらず、何千人ものアテナイ人が切り殺され溺死し飢餓や風雨にさらされて死んだ。他に何千人以上の者が奴隷となり、大半はシラクサの石切り場で重労働のために死んだ。紀元前四〇四年四月、スパルタ司令官リサンドロスがアテナイを占領した。

トゥキュデデスは「戦史」執筆の頃、不興を買っていた。紀元前四二四年に將軍であった彼とその軍隊は、トラキア沖海戦で敗北し、かれはその領地へ追放された。トゥキュデデスは、四〇四年から三九九年の間、アテナイに居たらしいが、その頃、亡くなったといわれる。紀元前四六〇年頃といわれる生誕も定かでない。かれの「戦史」が中断の形で終っており未完であることから、評釈者の中には殺害説を主張する者もいる。ともあれ、「戦史」の主題は、スパルタによるアテナイの敗北ではなく、ホップズがいうように民主主義の「愚かさ」でもない。トゥキュデデスの主たる関心事は、社会と個人の興亡における人間性の決定的役割を論証し、そして、自由乃至民主主義と、規律乃至自己統制が共存しうるかどうかを問題提起することであった。平和と、ソロンやペリクレス等の有能な指導力を得れば、共存が可能だと信じたがった。ペリクレスの死後、そして、ますます戦争が進捗するにつれ、かれは民主政体——その意味は「少数者と多数者の合理的で中庸のとれた混合に基づく統治」であった——が、戦争の重圧に耐えられないと確信するに至った。

トゥキュデデスは、民主政がアテナイ没落の原因だと信ずるところか、紀元前五世紀前半におけるアテナイの、強国への驚くべき進展を民主政治に起因すると考えた。デモクラシーということ、トゥキュデデスが意味したことは、一



定期間職務につき選挙による行政府や立法府に特徴づけられる近代代議政治ではなく、最も数の多い構成要素、即ち、下層階級の為に統治するすべての人民の政体であった。

ところがホップズによれば、トゥキユデイスは、「何よりも民主主義が嫌い」で、「名目上は民主的だが實質上はペリクレスの下での君主政」を好み、しかもかれは「王室系の家系」であるから「王権政治に最も賛成するように思える」という。ホップズは、トゥキユデイスの最大の嘆きの一つが、戦時中のアテナイは、ヘルモクラテスに率いられたシラクサと比べて「国民を良識をもつて導く第二のペリクレスを欠いたことである」ということを忘れてしまっている。トゥキユデイスにしてみれば、今後直面する「大窮地」とは、民主主義と責任性ある指導力が「戦争の重圧と大衆の激しい要求の下でいかにして持続しうるか」であった。

トゥキユデイスを反民主主義者に仕立てるのは、一六二九年頃のホップズ自身が「王権政治」の熱烈な味方であり、議会の挑戦に反対する国王の強力な支持者であったからである。ホップズは、事実上、トゥキユデイスをホップズ主義者に仕立てたのである。一六三八年、第三代デボンシャー伯宛書簡では「自分の仮定に夢中になっている愚か者、トゥキユデイスとお呼び下され」と書き、少なくとも一度、ホップズはトゥキユデイスと自分との同一視をほのめかした。とはいえ、ホップズとトゥキユデイスとの間に、性格上の類似性がなくもなかった。即ち、両者とも、悲観的、懷疑的、高度に知性的、冷静、そして少なくとも表面的に控え目だが激しい内面的緊張を伴った性格であった。また、両者とも、言葉の意味が、戦争等の事件の変動につれ、変化することを知っていた。トゥキユデイスは、「軽率な侵略行為と叙述されるのがきまりだったものが、今や、党派心の強い人々に見い出したいと期待する勇氣だともなされた。待期して将来を考へるのは臆病者の別の表現方法にすぎなかった。…」と書く。ホップズも「リヴァイアサン」の中で「ある人が知恵と呼ぶものを他の人は恐怖と呼び、ある人が残酷と呼ぶものを他の人は正義と呼び、ある人が浪費と呼ぶものを他の人は大度と呼び、ある人が沈着と呼ぶものを他の人は愚鈍と呼ぶ。」と記す。こうしたホップズのトゥキユデイスとの同一

視は、しばしば翻訳にあたってはトウキユディエスやその時代の状況よりもホップズとその時代の状況にひき寄せる文体となった。しかし、最大の問題は、ホップズが、国王と議会との対立を、君主政の賢明さと民主政の「愚かさ」との間の、事実上和解しがたい対立としてみてしまったことであろう。事實は、そうした対立であるよりも、国王の側に問題があった。例えば、ジェームズは臆病者の上、既婚し父親でありながら、強い同性愛癖があった。優柔不断で浪費家であった。ジェームズは、通常支出、即ち、戦争とは無関係な支出が約三〇万ポンドの年収内で収まったエリザベスと異なり、最初から収入をはるかに超えて使った。一六一四年までに、ジェームズの支出は、年四〇万ポンドから五二万二千ポンドにはねあがった。その内、エリザベスが使ったのは二倍の額七万七千ポンドを宮廷の日常生活費として使用した。一六一二年までに五〇万ポンドの負債があり、一六二四年頃にはそれは総額一〇〇万ポンドに達した。これほどまでに浪費しなければ、議会は、かれの課税権に挑戦することはなかったであろう。そしてまた、一六二五年六月の第一回議会で、チャールズが譲歩していれば、国王と議会は十分融和的であつたらう。チャールズは二ヶ月後に議会を解散したし、一六二六年二月に召集された第二回議会を五ヶ月足らずで閉会した。一六二八年三月、第三回議会が召集された——その頃、ホップズは、トウキユディエスの翻訳を完成していた——が、一六二九年一月、国王の表現では「反抗的で扇動的な態度」の為、解散された。以後七年間、議会は開かれることがなかった。

ホップズ訳『戦史』は、ホップズが内乱よりずっと以前から、否、一六二九年以前から、既成秩序に対する挑戦——そうした挑戦がいかに穏やかで理性的であれ——に不寛容であつたことを示す。それ故、「安定し明瞭な権威の側に立たざるをえず、ジェームズやチャールズの議会で、商人等の企業家の「政治的野心」を蔑んだにすぎない。『市民論』や『リヴァイアサン』以前においても、四〇才のホップズは既に、悲観的で懐疑的で、風刺屋で皮肉屋で、人間性の暗部を強調し、宗教について二律背反的で、用心深く自己防衛的で、横柄だが上位の者には慇懃で、仲間には大した好意を示さなかつた。

ところで、ホップズ四〇才の時、一六二八年六月二〇日の第二代伯爵の死後、ホップズの生活には、しばらくの間、新しい変化があった。伯爵は、遺言で、ホップズに年八〇ポンドの恩給を決めていたが、それは支払れることはなかった。当時のデボンシャーの家計報告は明らかに不完全ではあるのだが、ホップズが伯爵に貸した金も——利子分は支払れたが——元金は支払れなかったようである。ホップズは、「自叙伝」の中で述べたとおり、「軽視された」と感じたのであろう。しかし、伯爵没後五ヶ月以上経った一六二八年十一月近くになっても、ホップズは、依然デボンシャーのロンドン邸に住んでいたし、一六二九年の初めの二、三ヶ月間そこに滞まっていたとみてよい。一六二九年のある時、ホップズは、ジャーヴァス・クリフトンの家庭教師となった。(レアド、ピーターズ、そしてミンツも、クリフトンを誤ってクリントンと記す。) かれは、年齢およそ一七才、ノッティンガムシャー州のジャーヴァス・クリフトン卿の長男で継承者であった。クリフトン家は、征服王ウィリアムと共にイングランドへ来た最初の一族で、ノッティンガムシャーに久しく在住する高貴・華麗な名門であった。息子の師よりわずか一才年上であったジャーヴァス卿は、初代デボンシャー伯の知己を通じてホップズに出会ったと思われる。

ホップズと弟子ジャーヴァスは、一六二九年と三〇年の一八ヶ月間を、大陸で、取り分けフランスで過ごす。一六三〇年の三月の大半をパリで過ごし、その後、ミラノ領経由でヴェニスに向おうとしたが、折りしもマントヴァ継承戦争の為、止むを得ず、四月初め馬車でリヨンに向った。四月二二、二三日、騎馬にてリヨンからジュネーブに移り、そこに二ヶ月以上滞在した。一六三〇年四月二九日付ジャーヴァス卿宛第二信でホップズは、ジュネーブに到着し、プレイヴォウ(Prevoist)氏なる人の邸に宿泊したことを伝えた。プレイヴォウ氏とは、恐らくピエール・プレイヴォウのことで、一五四九年にイースタダンに生まれ、一六三九年に亡くなった人物のことであろう。プレイヴォウ氏は「その市の誰よりも高い評価をえている牧師で、極めて賢明で高潔な人物、ジュネーブ風のところはない(厳格なカルヴィニスト的でないという意味か? 岡部)が、その地の住人や牧師に極めて必要な人物」であった。プレイヴォウ氏の書庫が、オーブリーの伝

える「とある紳士の書庫」だとすれば、ホップズはそこで初めて「幾何学に眼を向け」たことになる。所謂、「幾何学との恋」の事件である。オーブリーは、ホップズがその時、「四〇才」であったと記すが、正確には四一才か四二才になったばかりだから、オーブリーが誤ったか推量した可能性がある。その後、ホップズは青年ジャーヴァスにイタリア語を教えながら、イタリア訪問を企てるが、戦争の為、オルレアンに引き返した。六月一〇日頃にはそこにおいて、一ヶ月余滞在了ららしい。七月一〇日付のジャーヴァス卿宛書簡では「イングラランドでお会いすることを」楽しみにして待ち、それは「最も遅くとも来春（一六三二年）」には「との希望で結んでいる。しかし、一六三〇年一月二日付、ハードウィック発信のジャーヴァス卿宛ホップズ書簡は、帰国し、その日までにデボンシャーに復職したことを示す。「私の復職は、あなたの厚意ある御手紙のお陰でしょう。それによって、私の女主人は、クリフトン氏への私の奉仕をあなたが心よくお認め下さったことを理解されるでしょうから。」それからすれば、恐らく、クリスチャンへの卿の推薦状が先行していたのであろう。ホップズとジャーヴァス卿とは、一六三一年一月二三日付書簡、一六三五年一月三〇日付パリ発信書簡からしても、その後も親しい間柄を保っていたことを証明する。しかし、ジャーヴァス卿とその子息の関係は、一六三六年頃に冷えきり深刻な状態に陥っていた。それは、子息が自分の妻に対し「分別をもって」行動せず、「不節制」をやめず、資産を「浪費」したからである。子息はその浪費による負債のため一度ならず提訴された。ホップズの以前の弟子、第二代デボンシャー伯と同じく彼も「浪費家」であった。卿と子息の仲違いは全く和解せず、卿が一六六六年に亡くなった時、生存中の子息ジャーヴァスではなく、二男のクリフォード・クリフトン卿に財産が譲渡された。ホップズが「自叙伝」の中で、青年ジャーヴァスの指導について全く触れないのは、ジャーヴァス卿がホップズの友人で時にはパトロンでもあったし、デボンシャー家の友人でもあったからであろう。その上、卿は、ホップズ自身も含むサークル、即ち、ニューキャッスル伯爵（ウィリアム・キャヴェンディッシュ伯爵のこと。第二代デボンシャー伯爵と同じく、エリザベス・ハードウィックの孫で、一六六五年以降、ニューキャッスル公爵となる。）のサークルに属していた。

ところで、クリフトン家の古記録は、ジャーヴァス卿とホップズの間、内乱以前の往復書簡を残しているものの、青年ジャーヴァスについても、家庭教師としてのホップズについても全く言及しない。恐らく、ホップズもクリフトン家も「みじめで嘆かわしい」ジャーヴァスとのつながりを忘れてしまったのであろう。